

# 道博協ニュース

## 第51号

発行 平成7年(1995)6月25日  
発行所 北海道博物館協会  
事務局 札幌市厚別区厚別町小野幌  
北海道開拓記念館内  
電話 011-898-0456  
FAX 011-898-2657

### 第三十四回北海道博物館

### 大会七月六・七日

### 松前町で開催

第三十四回北海道博物館大会ならびに平成七年度北海道博物館協会は、北海道の古都、道南の松前町で開催します。開催内容が次のようになります。決まりました。多くの皆様の参加を期待しています。

会場 平成七年七月六日

(木)・七日(金)

会場 松前郡松前町神明三

○番地、松前町民総

合センター(松前町郷

土資料館)

☎〇一三九四二一三

〇六〇

大会テーマ 「地域文化の

継承と博物館」

第一日目(七月六日)

受付九時～九時三〇分

平成六年度事業報告・平成

六年度会計収支決算報告/会

計監査報告/道博協基本問題

検討委員会の設置について/

平成七年度事業計画案につい

て、平成七年度会計収支予算案について/役員改選につい

て/第三十五回北海道博物館

大会の開催地について/その

他

表彰式(二名の予定)

特別報告(十一時～十一時

三〇分)

「日本における博物館の現

状」日本博物館協会専務理

事毛利正夫氏

記念撮影・昼食(十一時三

〇分～十三時)

特別講演(十三時～十四時

三〇分)

「北海道の近世絵画につい

て」講師 宮城学院女子大

学 助教授 井上研一郎氏

シンポジウム 「地域文化

の継承と博物館」

司会者 斜里町知床博物館

館長 金盛典夫氏

報告者①知内町郷土資料館

学芸員 高橋豊彦氏

報告者②上ノ国町教育委員

会 文化財課長補佐・学芸

員 松崎水穂氏

報告者③木田金次郎 美術

館 学芸員 久米淳之氏

報告者④今金町教育委員会

文化財保護係長 寺崎康史

氏

閉会式

主催者謝辞(北海道博物館

協会会長、次期大会開催地

挨拶

松前町内史跡・施設等視察

見学

①松前城資料館 ②寺町

③桜資料館 ④松前藩屋

敷

参加料

(1)大会参加費 会員三、五〇〇

円(非会員三、〇〇〇円)

(2)懇親会参加費 四、五〇〇円

(会場・松前町町民総合

センター三階)

宿泊について

町内ホテル等参加者各自申

し込みとする。

大会申し込み 大会時にパ

ンフレット等資料を配布希

望する館園は、二〇〇部(若

(月)までにご送付下さい。

事務局

〒〇〇四 札幌市厚別区厚

別町小野幌 北海道開拓記

念館気付

北海道博物館協会 事務局

TEL・〇一一一八九八―

〇四五六

FAX・〇一一一八九八―

二六五七

松前町内博物館等施設案内

松前町郷土資料館

幕藩体制下、道内唯一の城

下町であった松前の歴史をわ

かりやすく展示している。道

指定文化財「求福山山車(だ

し)は安政期の製作で、城下

の祭祀に使われたものである。

松前城資料館

昭和二十四年に焼失した松

前城を三十六年に再建して、

松前家関係資料や松前波響作

「桜下美人図」などを展示。

桜資料館

桜の種類や接木の方法、加

工品など桜の全てがわかる。

松前藩屋敷

沖の口奉行所、武家屋敷、

商家など松前の往時を復元。

## 二十一世紀の北海道

## 博物館協会を考える

青木隆夫

## 一、一九九五年と課題

北海道博物館協会（以下協会）が一九六一年の六月に設立されて今年で三十五年の年月が経過しようとしている。この間、道内では数多くの博物館施設が建設され、協会への加入もほぼ順調に増加し、現在なお施設の方は更新され増え続ける傾向にある。しかしながら、これに伴い各施設の対象や内容（資料、展示等）、機能、運営なども多様化の一途をたどり、これらの状況から協会の設立当初とは組織面や活動面などに、大きな変化が生じてきている。これまでにその都度変化に対応した運営の改革を図ってはきたものの本質的な対応にはなっていないことも事実であった。このことから協会が今後どのような方向を目指すのか、昨今改めてその「あり方」についての論議の必要が求められてきている。昨年の

## 第三十四回協会の総会席上、

この課題について協会として全力を挙げて取り組むことへの要請が行なわれ、本格的な検討に向けての作業がスタートしようとするところである。今後大きな期待を持ってこの作業に注目し、論議への積極的な参加を求めて行きたいように思う。今年、一九九五年は二〇〇〇年まで残りわずか五年となり、二十世紀から二十一世紀へ移行する世に言う「世紀末」現象が社会に見え隠れしつつあるようである。又、今年には日本の戦後五十年の節目の年でもあり、各方面で日本の歩んだ五十年を検証する企画等が繰り広げられてもいる。間近にせまる高齢化社会や産業の空洞化現象に代表される経済構造の変動、教育、文化状況の変化の現状から新たな時代が要求する二十一世紀に向けた協会のニュアールの元年とするには格

好のタイミングの年であり、課題の年であるように思う。

## 二、博物館の現状と時代性

道内には現在二〇〇を越える博物館等施設があり、一時の開館ラッシュは過ぎたものの末だに増加の傾向にはある。この内、協会には一六〇を越える団体加入があつて他県との比較でも密度の濃い組織となっている。しかし「博物館の時代」「博物館の果たす役割」が声高に叫ばれてはきたものの具体的、組織的な取り組みや論議については現場レベルではそう積極的な形で成されてきてはいない。更に施設はできたものの、その運営や機能、利用面での足元の課題が山積しているのか現状である。他方、昨年からの議論を呼んだアメリカ・スミソニアン協会、航空宇宙館での「原爆」展企画の開催中止（変更）については博物館関係者が受けとめなければならぬ大きな問題を提起していたように思えたが、それに対しての反応は希薄である。

「ネットワーク」「生涯教育」

「地域の文化」「情報発信」等、これまで協会が事ある都度テーマとしてきた言葉は今

のところキーワード以外の役割を果たしてきていないのも現状である。学芸員の配置問題や予算、利用者の動向、企画の実践や資料の管理等が今ある施設の現実問題としてあり、国内では価値感の変容と共に環境問題が基本的思考として定着する中で経済、科学、社会は重厚長大から軽薄短小へと刻々と転換の兆しを見せている。時代は否応なく新たな課題を生産し、それを消化しようとする強力な機関を要求しているようである。

## 三、二十一世紀を見据えた協会の方向

組織としての協会が今後どのような方向性を持ちながら機能して行かなければならないのか。今、問われていることはこのことに集約されているのである。個々の館園、個人の集合体として協会が立つならば当然、単に親睦を図る以上に、あらゆる共通の利害を追求し、活動し、実現して行くことが必要とされるのである。ところが硬直した組織ではこれを求めるのは難しい。又、柔軟性を持ち過ぎた組織でも、今度はそれを維持し継続して行くのは至難の技である。つまるところ現在の協会は無難（妥当）な存在の組織体と言えのるかも知れない。協会は今、その上から自らの検証作業が必要とされている。ただ漠然とした中から何をどう見直して行くのか、どう変えて行くのかでは方向は見えて来ない。現行の問題点を最大抽出し、検討し、今後予想され協会の次代に向けての解決策として結論を導いて行くことが重要となってくるのであろう。しっかりとした目標を掲げて単に組織のたがを締め直すという立場ではなく、「あずまし」「抱擁力のある」「強力な」「行動力のある」協会として存在して行くための検討をして行かなければならない。この前提として会員全員がすべてこの課題に取り組む姿勢の中で、他者に代行させることなく、自らが積極的に関わることによつてのみ協会の未来を決定して行く作業となるからである。（北海道博物館協会理事）

## 道東三管内博物館

### 施設等連絡協議会

北海道東部の釧路、根室、十勝の三管内にある博物館施設等の連携と情報交換、研修などの事業を行なっています。

この会は、生涯学習施設として

平成六年度には、十一月に厚岸町で「国泰寺の経営について」の講演、「歴史的建造物群の地域的保存運動」をテーマとした研究協議を開催。管内・外を問わず多くの出席者を得て、活発な研修を行なうことができました。

また、平成七年度の総会が五月十六日に釧路市立博物館を会場に開催され、事業計画等が決定しました。

これによると、今年度の学芸職員等研修会は九月二十一日～二十二に、標津町を会場に実施の予定です。テーマは「新しい博物館施設を作る(仮題)」。

主要な事業は、北海道博物館協会、北海道開拓記念館が主催する博物館活動交流推進会議に共催し、研修会の開催に参加する館・園の名簿、事業計画などをまとめた連絡紙の発行、移動展の開催などがあります。

## 十勝管内博物館施設等協議会

本会は十勝管内の博物館施設等の活動に携わる職員等の交流と資質の向上を図ることなどを目的に設立した協議会で、会員は31名が参加して、活動を行なっています。

十勝は市町村をはじめとする公立の博物館施設の他に、大小の企業もしくは個人が設立した博物館施設が多いことが、一つの特徴となっています。とくに、二～三年の間に私設の資料館・美術館的な性格を持った施設が増えつつあります。

◆設立の経緯・目的◆  
十勝では昭和四〇年代になつて、浦幌町郷土博物館、上土幌町ひがし大雪博物館などが開館し、この頃から各館職員や、博物館活動に携わろうとする人たちの間で、「横の連携」の必要性が考えられ、五〇年代以降には、このような組織の発足に向けての動きが模索されたが、具体化には至りませんでした。

しかし、このようなバックボーンがあったこともあり、新しい施設、若手の学芸職員が増えたこともあり、改めて「横の

連携、多様化するニーズに応えた博物館活動」の必要性が提起され、平成五年五月に有志による会合が持たれ、会の設立が確認されました。

設立総会は同年七月、帯広百年記念館で開催され、会長以下の役員、会則などが決まり、正式に「十勝管内博物館施設協議会」としてのスタートを切りました。

本会は十勝管内の博物館等の活動に携わる職員が、相互に交流を深めるとともに、情報の交換・発信の中核となることにより、館・園はもとより私たち一人一人が抱える問題点の解決の糸口にしたいと考えています。

◆会の活動◆  
本会では、研修会の開催(年一回)、会報「とちちネットワークニュース」の発行、情報交換会

の開催などを行なっています。

平成六年度研修会は十二月に広尾町で宮内令子氏(北海タイムス社)を講師に招いた講演と、「住民参加の博物館活動を考える」と題したパネルディスカッション、広尾町内の施設見学を行ないました。

平成七年度は、去る五月二十五日に総会が開催され、研修会は本別町で開催することなどが決まり、総会後の情報交換会では、各館の事業や、さまざまな問題について、活発な情報交換が行なわれました。

本会は今年でやと発足三年目を迎えたところであり、より多くの施設、職員の参加を願っているところであり、皆様のあたたかい指導・ご支援を願って止まない次第です。

◆役員◆  
会長・河野義博(本別町歴史民俗資料館)。  
副会長・川辺百樹(上土幌町ひがし大雪博物館)／澤村寛(足寄町教育委員会)。

事務局・帯広百年記念館。  
(文責 北沢 実)



近ごろ、早朝や休日に山野を散策する人々が増えていきます。旭川市の市街地近くにある嵐山には、北方系植物を集めた北邦野草園が開設されていることもあって、新緑が美しい五月〜六月にかけては、多くの市民が野草や鳥の観察に訪れます。こうした人々の中には、野草や鳥などについて疑問を抱き、博物館に問

合わせてくることも度たび見受けられるようになってきました。

人々の間に生涯学習という言葉が定着し、さらには余暇時間の増大に伴い、博物館は社会教育施設の中でも生涯学習の拠点施設と考えられています。

旭川市博物館は、こうした

です。また、普及活動と研究活動を有機的に結び付け、市民が調査研究に積極的に参加できる環境作りも進めています。

平成六年度には体験学習「嵐山を調べよう」を四月から十一月にかけて月一回開催しました。参加者とともに身近な自然を調べ、翌年三月に

## 自然史系学芸員の現場から⑤ 市民参加による自然の調査

旭川市博物館学芸員 南 尚 貴

社会的背景を考慮し、事業展開に当たっては、調査研究に基づいた普及活動を一つの柱にしています。博物館の主要な使命は研究活動を通じて地域性を浮き彫りにすることと位置付け、その成果をどのように市民の方々に還元していくのか、その手段として教育普及に力を注ごうというもの

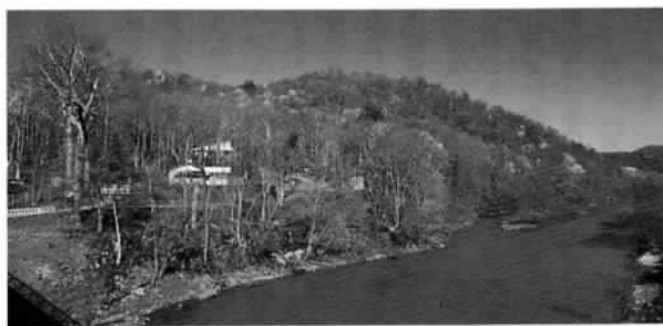
その成果に基づいた企画展を開催することが目標でした。エゾシカの樹皮食いやキビ

タキ・ヤブサメの分布地図作り、カタクリの花弁数の変異などを調査し、とかく一方向的な情報提供に終始しがちな事業を双方向的な情報交換型に変える試みでもありました。体験学習そのものは、月一

回の開催でしたが、カタクリの群落の中に変異があると、その株に目印をつけて回ってくるご夫婦がいたり、エゾシカの食べた樹種、樹高、胸高直径を測定する方が出たりと、自ら積極的に嵐山を歩く人が出るなど予想以上の成果がありました。

平成七年度には、同様の趣旨で「森の生態」を五月から開催しています。樹木社会の構造や、その中で生活する動物の様子を毎月観察しているというものです。今年は五月から十月まで六回の開催を予定しています。毎回二日構成で、一日は討論形式による学習を、他の一日は嵐山で討論のテーマに基づいた調査を行い、より科学的な見方を習得することを目的にしています。

こうした企画を通し、今まで何気なく見ていた自然を見直すことができ、そして疑問点を抱えて博物館を訪れるということを繰り返す中で、博物館職員と市民、そして市民の方々が交流を深める関係が



築き上げられるのではないかと考えています。このような相互交流によって、博物館は情報集積地として機能し、市民の方々の真の生涯学習の拠点施設として位置付けられるのではないかと考えています。旭川市博物館は、新館となつて開館して二年が経とうとしています。より多くの人々が集い、気軽に情報交換できる環境を作り上げていきたいと思っています。

館・園紹介

## 北の写真発祥の地函館に

## 写真歴史館オープン

「世界三大夜景」の誉れ高い函館山。その裾野に明治・大正期の洋風建築物が数多く軒を連ねています。

函館市写真歴史館は、西部地区と呼ばれるこれら歴史的建造物の集積地にあつて、その中心に位置する元町公園内にオープンしました。

明治末期の代表的な官庁建築「旧北海道庁函館支庁庁舎（道指定有形文化財）」の二階



部分を再活用した館内では、同じく明治の写真やカメラ達が皆様をお迎えします。

我が国最初の貿易港として海外に門戸を開いた函館は、諸外国からもたらされた異文化にいち早く触れ、それを自らの生活に積極的に取り込み、発展させてきました。

写真もその一つで、同じく開港場であつた横浜・長崎とともに、函館は、日本の写真の礎として、写真技術の発達に大きく関わってきました。

写真歴史館では、開港がもたらした写真文化の歴史を、多くの方々に伝えていくこととしていきます。以下、この展示概要をお知らせします。

## ●シンボル展示

日本最古の写真  
安政元年（一八五四）のペ

リー日本遠征に同行した写真家ブラウンは、日本の風景や人物を、記録として写真に納

めました。

箱館でペリーを応接した三人の松前藩士もブラウンにより写真撮影され、ペリーの手からそれぞれ記念品として写真が贈られました。

これらの写真は一四〇年を経た現在に至るまで、子孫の方々の手により、守り伝えられてきたのです。

当館では、この貴重な写真の一枚、現存する我が国最古の写真「松前藩勘定奉行石塚官蔵と従者」（銀板写真）を、撮影時に着用した袴や刀などとともに展示しています。

## ●写真術の箱館渡来と

三人の営業写真師  
ペリー等によつてもたらさ

れた写真は、開港による近代日本の幕開けにより、写真術として大きく開花しました。

各国の領事館が置かれるようになった箱館では、初代ロシア領事として着任したゴシケイウイチによつて写真技術が伝えられました。

そして、写真との初めての出会いから十年を経た元治元年（一八六四）箱館で、北海



道最初の営業写真師木津幸吉が誕生したのです。さらには木津とともに写真を学び、北海道開拓当初の状況をレンズを通して克明に記録した田本研造、東京を舞台に活躍した横山松三郎などの著名写真師が、箱館から輩出しました。

当館では、これら箱館で繰り広げられた日本写真史のページ目を飾る様々な出来事を、北海道写真史料保存会の方々が収集された写真機材や市民の皆様からお寄せいただいたカメラ類、さらには最新の技術を駆使した立体映像装置「立体写真鏡」などにより展示しています。

また、写真館用の大型写真機材の一部については、直接手で触れたり操作できるように配置しております。特に最近まで活躍していたスタジ

オ用照明につきましては、お手元のカメラ等のストロボ光と連動して実際に発光いたしますので、皆様お気軽に写真館風の芸術的(?)なポートレイトを撮影することができますようになっています。

函館にお越しの際は、ぜひともお立ち寄りください。

函館市写真歴史館案内  
場所／函館市元町十二番十八号 元町公園内 JR函館駅前から市電利用(末広町まで) プラス徒歩五分

開館時間／午前九時から午後七時まで(十一月から三月までは午後五時閉館)

休館日／年末年始(十二月三十一日から一月一日)

入館料／一般 二〇〇円  
学生・生徒・児童 一〇〇円  
団体(十五名以上) は二割引

お問い合わせ先／当館(元町観光案内所内) ☎〇一三八一  
二七—三三三三(☎同)

函館市商工観光部観光室  
観光課 主事 池田 敏春

## サケと北の淡水魚科学館

## 千歳サケのふるさと館

秋になると、千歳の街を流れる清流千歳川をサケの群が上ります。そのサケを増殖するため、親魚を街のすぐ近くで捕獲します。

その方法は他にはない水車式で、百年の歴史があります。原形がアメリカインディアン漁具であったことから、「いっしか人々に「インディアン水車」と呼ばれ、親しまれるようになりました。



千歳サケのふるさと館

千歳サケのふるさと館は、そのインディアン水車を背に建てられ、平成六年九月十日にオープンしました。「サケと北方園の淡水魚」の科学館をめざし、博物館相当施設に登録した青少年の社会教育施設ですが、一般の観光施設としても大きな期待が持たれています。

建物は地上二階、地下一階ですが、総面積は三千三百平方メートルで、外見よりも広い館内に驚く方もあります。さて、館内の主なものを紹介しましょう。

**自然の川底をのぞく千歳川観察室**

日本ではもちろん世界でも初めて、川の護岸がそっくり観察室になりました。四季折々に自然の魚たちが訪れます。群れをなし海へ下るサケ稚魚たち。産卵のために海から上る赤腹のウグイ。ひよろひよろとおどけた泳ぎのヤツメた



ち。華麗ですましやのヤマメの群。川に住む貝やつぶや虫たちも見えます。そして海から上るサケの群れが観察室の窓を圧倒します。

最大高さ五メートルの水槽とサケの仲間たちをはじめ、二〇を超す水槽に、珍しい二六種類のサケの仲間と、三五種類の北の淡水魚達

が泳ぎます。支笏湖のチップ

もいます。

**サケのダンス水槽**

タンゴとワルツの音楽に合せてサケたちが踊ります。ほんとかな？

サケのダンス水槽

サケのダンス水槽

サケのダンス水槽

幅九メートルの画面で見る「サケの一生」砂利の川底に産卵するサケは見ものです。物知りコーナー

サケの知識なら何でもおまかせ。「サケの音楽」や二人で遊べるQ&A、魚と遊ぶ「タッチプール」もあります。レストランとショップ

館内のレストランとショップ。ショップには、オリジナルグッズが並びます。

このほか、毎年四月〜八月に企画展示をします。現在「アイヌ文化とサケ展」を開催中。次に屋外施設を紹介いたします。

全体を「インディアン水車公園」と名付け、次のような施設があります。

**インディアン水車橋**  
水車が直下に観察出来ます。サケの自然産卵池

公園内に設けた「せせらぎ水路」にあり、サケの自然産卵が観察出来ます。

その他にも児童公園、芝生の広場、駐車場、お土産店などがあります。

なお、公園や館は、財団法人千歳青少年教育財団が運営

しております。

(木村義一 千歳サケのふるさと館館長)

## 千歳サケのふるさと館案内

★開館時間 一月二十一日〜八月三十一日 九時三十分〜五時

九月三十一日〜十一月三十日 九時〜五時

★休館日 十二月一日〜一月二十日休館、他年中無休

★入場料 一般八〇〇円 (六四〇円) 高校五〇〇円 (四〇〇円) 小中学 三〇〇円 (二〇〇円) 幼児無料

( ) 団体 (二十名)

★交 通 JR千歳駅から徒歩七〇〇m (約二十分)

千歳空港から約五km (タクシー約十五分) 高速道 千歳ICから約四km

・目印「インディアン水車」または「交通公園」

★問い合わせ先 (千歳サケのふるさと館)

千歳市花園2丁目

☎〇一三三―四二―三〇〇

一 FAX〇一三三―四二―一三三〇



館・園のおもな事業行事

七月～九月

- 道立青函トンネル記念館  
8・10～17「世界の二大海底トンネル展」
- 道立函館美術館  
7/1～8/20「印象派の華」展、8/26～10/1「ピユッフエ展」
- 開陽丸青少年センター  
7・27～8・16「船と文化特別展」(北前船が運んだ文化)
- 黒松町ブナセンター  
7・9「白井川ブナ林」9・24「添別ブナ林」(ウオッチング)
- 8・11～13「なつのもり(体験)教室」
- 室蘭市青少年科学館  
7/下旬～8/上旬「夏休み科学クラブ」天文・電子ほか
- 8・1「展示室無料公開」
- 登別市郷土資料館  
7・9「糸つむぎ」9・10「機織り」
- 有島記念館  
6/9～7/16「有島記念館未公開資料」展、7/29～9/15「有島武郎青少年公募絵画展」
- 真狩村羊蹄ふるさと館  
8・6「羊蹄ふるさと館フオーラム」
- 仙台藩白老元陣屋資料館  
7/8「資料館講座・陣屋の昆虫」
- 苫小牧市科学センター  
7/16・30、8/6・20、9/3「親子日曜教室」8/2・3「夏休み親子科学教室」Let's・Go教室
- 7/8・22「火おこし」8/12・26「タンクラブ製作」9/9「キーホルダー教室」9/17～24「小中学生発明展」その他各種講座
- 三笠市立博物館  
7/15～10/15「サーベルタイガーの世界」展
- 岩見沢市郷土科学館  
7/21～8/27。「万葉の植物押し花展」、8/9・10「郷土歴史学習会」、9/1「星座教室」9/10「野草学習会」
- 栗山町開拓記念館  
8/3「竹筒水鉄砲づくり」8/9～31「郷土栗山の移り変り」
- 美唄市郷土史料館  
7/16～8/6「写真展」8/13～9/24「戦後五十年を顧みて」展
- 砂川郷土資料館  
8月～10月「うちわ展」
- 札幌市青少年科学館  
7/25～8/20「水と空気のワンダーランド」(仮)展、7/27、28「形象講座」7/30、8/1～6、13、20「夏休み工作会」8/2～4「紙飛行機大会」9・1お・23「みんなの楽しい実験広場」
- 北海道開拓記念館  
7/8～8/20「秦の始皇帝とその時代」展、7/2「昆虫の生活」久万田敏夫氏、8/20～11/3「ライマンコレクション展」、9/17(講演会)「明治初期の北海道とマサチューセッツ州」藤田文子氏、「三内丸山遺跡を掘る」岡山康博氏
- 北海道開拓の村  
7/9「いろいろっ子の会演奏会」7/29「児童写真会」7/30「北海道郷土芸能」8/6「七夕まつり」8/12・13「大道似顔絵描き」8/20「北海道郷土民謡」以下毎週土日曜催事あり
- 札幌市豊平川さけ科学館  
7月中「各河川さかなウオッチング」7/9星置川、7/16発寒川、7/23豊平川
- 道立三岸好太郎美術館  
7/20～8/27「道化とマリオネット」8/31～10/10「アトリエの夢」(三岸好太郎展)
- 道立近代美術館  
7/14～8/20「モネ」「睡蓮」今日」8/26～10/1「横山大観・海・山・空の世界」
- 道立文書館  
7/15～23「道立文書館開館十周年記念―北海道の開拓につくした外国のひとびと」展、7/15(講演会)「トミと北海道立文書館」田中彰氏、「史料からよみがえる世界」澤地久枝氏
- 市立小樽文学館・美術館  
8/4～9/17「小熊秀雄と池袋モンパルナス展」8/4(講演会)「硝煙と絵筆」宇佐美承氏、「池袋モンパルナスに想う」窪島誠一郎氏
- 恵庭市郷土資料館  
7/22～9/24「ラジオ・蓄音機展」9/9・14(講座)「縄文字器をつくる」
- 当別伊達記念館  
8/1～11/3「当別開拓文書」展

道博協通信 ②

●役員の交代

新年度の人事移動等によりまして、新たに次の方々が役職の交代により道博協役員に就任されました。会則の一〇条二項により、任期は松前大会の七月六日までとなります。(平成六年総会以降を含む)

副会長 池田忠之氏(道立近代美術館副館長)同、鈴木絃一氏(旭川市博物館館長)、同、山丸和幸氏(アイヌ民族博物館館長)

理事 菅原繁昭氏(市立函館博物館館長)同、石谷善吾氏(帯広百年記念館館長)同、中文雄氏(滝川市美術自然史館館長)、本間 馨氏(小樽市博物館館長)